

- Global sea-surface temperature distribution determined from an environmental satellite, *Mon. Wea. Rev.*, 100, 10-14.
- Smith, W.L., P.K. Rao, and W.R. Curtis, 1970: The determination of sea surface temperature from satellite high resolution infrared window radiation measurements, *Mon. Wea. Rev.*, 98, 604-611.
- Tarpley, D. J., and B.A. Raymond, 1975: Automated measurement of sea surface temperature from a geostationary environmental satellite, NOAA/NESS Unpublished Memo.
- Warnecke, G.M., L.M. McMillin, and L. J. Allison, 1969: Ocean current and sea surface temperature observations from meteorological satellites, NASA Tech. Note, D-5142, 1-47.
- , 1971: Remotesensing of ocean currents and sea surface temperature changes derived from the Nimbus II satellite, *J. Phys. Oceanogr.*, 1, 45-60.
- 渡辺貫太郎, 1969: 表面水温における問題点, *海と空*, 45, 99-122.
- , 1972: 宇宙からの表面水温の観測, *水温の研究*, 17, 2-11.
- , 1972: 人工衛星による海洋環境の観測, *気象研究ノート*, 113, 141-180.
- 山本孝二, 荒井 浄, 阿部勝宏, 三木芳幸, 1977: 人工衛星赤外資料による海面水温の検出, *沿岸海洋研究ノート*, 15, 29-36.



吉野正敏著

気候と人間シリーズ 1

世界の気候・日本の気候

朝倉書店, 1979, A 5 版, 136頁, 1,800円

同じ著者の「気候学」(1978年大明堂発行, 自然地理学講座 2, 350頁, 2,500円。天気, 1978年 9月号で紹介されている)を, 著者が学部で行なう講義に対応するものとすれば, ここで取り上げる「世界の気候・日本の気候」の内容は, 大学院のセミナーに対応するものといえよう。前者が, 没個性的な学問体系の構築であるのに対し, 後者は, 気候学研究に対する著者の考え方と方法がかなり自由に示されて個性的である。

内容は独立した三つの部分に分かれている。序論的な1章では, 同じ気候であっても, 時と場所によって, 人間社会に対する意味が非常に異なる点が強調される。この視点が, 現象の局地的特性をできるだけ詳しく調査しようとする著者の姿勢に通じるのであろうか。

2章では, 各季節に特徴的な気候現象が, 1ヶ月毎に分類されて, 歳時記風に示される。その書き方はズームレンズ的である。広角にすると地球全体が視野に入る。望遠にすると世界の一点の局地性がクローズアップされる。しかも, その中心に著者が立っていることが多い。著者の視野と行動半径の大きさに驚くばかりである。しかし, 焦点距離が目まぐるしく変わるので, 気候学を知らない筆者は少なからず面くらってしまった。

3章, 4章は同質の内容で, 気候学のいくつかのトピックスについて, 著者が発表した論文のエッセンスを紹

介したものである。それぞれ独立した六つのセミナーから構成され, 論文への橋渡しをする。すなわち,

- 第3章: 1) 西海岸性気候の考え方
- 2) 冬の北海沿岸の高潮災害
- 3) ポルトガルのぶどう栽培
- 4) 都市気候の歴史と大気汚染
- 第4章: 5) 気圧配置から見た日本の動気候
- 6) 日本の季節区分と各季節の特徴

である。著者は, まえがきで, 「少し詳しくすぎる記述のようにも思うが, 人間環境としての世界の気候をとらえるには, 世界各地の非常に特徴が異なる気候を, このくらいの詳しきで見てもゆかなければならない」と述べている。2章が気候学の広がりを示したものとすれば, 3・4章は気候学研究の奥行きを示したものと見える。世界的視野を失わずに, 局地現象のひだに深く分け入る著者の方法をコンパクトな形で教えてくれる。

特筆すべきは, 随処に挿入された写真の効果である。1枚を除いてすべて著者が撮影した。しかも, 気候現象の説明という役割を越えて, 読者の感性に訴えかけてくる。霧の中に浮かびあがるタイの森林の立体感(図3), 氷の浮かぶライン川から立ち昇る冷氣(図6), ユーゴスラビアの都のリュブリアナのホテルから撮影したスモッグ(図65)。これらの写真は, 著者が, 実はプロの写真家であることを雄弁に物語っている。

上に述べた内容からわかるように, 本書は, 世界の気候を体系的に解説したものではない。気候学を既に学んだ者が《吉野気候学》の秘密を知る上で大いに参考になる本と思われる。(木村竜治)